

従来型、サブミクロン、超微粒子コンポジットレジン  
の3種に対し測定し、以下の結論を得た。

1. GC製ストリップスの表面粗さは約10~2  $\mu\text{m}$ へと段階的に変化していたが、他の2社製品は最も粗いものと次の間に5  $\mu\text{m}$ 差が認められた。
2. GCの600番および3M、井上の400番より荒いものは研削効果が大きい。しかしそれ以外は研削効果が小さく、全んど削除には働かない。
3. 最も荒いストリップスにおいては研削回数荷重に伴い研削量は増加したが、より細かいものでは研削回数の増加はある程度研削量を増加させるものの、荷重の増加は逆の結果を示すものもあった。
4. ストリップスの荒いものから細かいものへ段階的に研削を行えば、レジン・ストリップスの種類に関係なく最終的に中心線平均粗さ0.5  $\mu\text{m}$ 以下の表面状態を得ることができた。
5. 従来型レジンに比べサブミクロンおよびMFRは容易に平滑な面を得ることができた。
6. 研削方向による表面粗さの差は、研削回数の増加に伴い減少し、ほぼ同程度になる。
7. 細かいストリップスにおいては、ほぼ10回の研削により最終到達表面粗さに達し、それ以上の研削回数の増加はほとんど表面粗さに影響しない。

演題10. 下顎舌側歯槽粘膜部に遊離歯肉移植を行った1症例について

○中林 良行, 松丸健三郎, 菅原 教修,  
森川 伸彦, 石川 和史, 清水 隆公,  
上野 和之

岩手医科大学歯学部保存学第二講座

遊離歯肉移植術は、最近、一般的に行われるようになってきている方法であり、これまでも、頬側歯槽粘膜部に行った症例の報告は、多数ある。しかしながら、舌側歯槽粘膜部に行った症例の報告は、海外でも非常に少なく、本邦では殆どみあたらない。今回、我々は、 $\overline{34}$ 部の舌側角化歯肉の幅が殆どなく、ブラークコントロール指導後の歯ブラシや歯間ブラシ使用時、および、頻回の義歯調整にも拘らず、義歯使用時に、褥瘡性潰瘍や、擦過傷を $\overline{34}$ 部の歯槽粘膜部に、しばしば形成し、疼痛を訴えた35歳の女性患者に対して、同部に遊離歯肉移植術を施行、その後、現在まで4年間良好にメイン

テナンスしているので報告した。患者は、35歳女性で昭和52年5月26日に下顎前歯部の動揺が気になるという事を主訴として、近医の紹介により本学に来院し、その後、仕事の都合により、通院を中止したが、昭和55年11月11日再び来院し、第二保存科に紹介され、再び、初期治療を行った。しばしば、 $\overline{34}$ 部の頬側歯肉に歯ブラシにより擦過傷を形成したが、対症療法により経過観察し、咀嚼障害を訴えていた下顎臼歯部に対して、補綴科にて治療用義歯を製作した。しかし、頻回の義歯調整にも拘らず、義歯使用時に、しばしば褥瘡性潰瘍、義歯着脱時に擦過傷を $\overline{34}$ 部の歯肉から歯槽粘膜部にかけて繰り返し形成し、同部の機能的な角化歯肉の幅が狭く、厚さも薄いため、通法により口蓋の咀嚼粘膜を用いて遊離歯肉移植術を $\overline{34}$ 部に行った。その後、 $\overline{34}$ 部の歯冠修復を行い、全顎におよぶ補綴処置を行ったが、同部の歯周組織は現在まで良好にメンテナンスされている。このように、高度の歯周疾患罹患歯の見逃されやすい舌側の歯槽粘膜部に、歯周補綴後に擦過傷などの、なんらかの症状が現われている場合には、遊離歯肉移植術は、良好なメンテナンスにとって重要な役割を担うものと思われる。

演題11. 雌マウス顎下腺細胞質ならびに核画分アンドロゲン・レセプターのテストステロン投与の効果

○客本 斉子, 黒川 理樹, 根本 孝幸,  
根本 優子, 馬場 利恵, 吉田 元彦,  
佐藤 政直, 太田 稔

岩手医科大学歯学部口腔生化学講座

【緒言】マウス顎下腺はアンドロゲン依存性臓器でありアンドロゲンレセプター(AR)が存在する。ARの細胞内局在性には性差があり雄で約74%が核にみいだされる一方雌では約94%が細胞質にみいだされる。今回は雌マウスに testosterone を投与し、*in vitro* で細胞質ならびに核中にみいだされる AR 量を経時的に測定し、その変動に関して検討を行った。

【方法】雌雄 ddY マウスは testosterone propionate (TP) を皮下投与後経時的に顎下腺を摘出し、Tris-HCl 緩衝液でホモゲナイズ後、105,000×g で遠心しその上清を細胞質 AR 画分として、沈澱は洗浄後 5mM pyridoxal 5'-phosphate で抽出し核

AR 画分として用いた。細胞質ならびに核 AR 画分は2.5nMの合成アンドロゲン [ $^3\text{H}$ ] R1881 と結合させdextran-coated charcoalにて遊離の [ $^3\text{H}$ ] R1881 を除去後放射活性を測定し、レセプター量とした。なお投与 TP は testosterone として5, 50, 500  $\mu\text{g}/100\text{g B.W.}$ の三種の濃度を用いた。蛋白合成阻害剤 cycloheximide (CXM) は TP 投与の1時間前より初回6 mg/100g B.W. (皮下), 次いで0.6 mg/100g B.W. (腹腔) を毎時間投与した。

【結果】500  $\mu\text{g}/100\text{g B.W.}$ のtestosterone投与では投与30分後に細胞質 AR は著しく減少し同時に核 AR が増加した。核 AR の上昇は24時間維持された。減少した細胞質 AR は6時間では回復しないが48~72時間でコントロールレベルまで回復 (replen-

ishment) した。この回復はグリセロール密度勾配遠心のピークからも確認された。投与量が50  $\mu\text{g}/100\text{g B.W.}$ では投与後同様に減少した細胞質 AR は6時間で50%回復した。5  $\mu\text{g}/100\text{g B.W.}$ では投与後の減少も少なく回復に要する時間はさらに短かった。CXMは投与後1~6時間にわたり蛋白合成の90%を抑えた。CXM投与マウスではtestosterone投与後の細胞質 AR の回復は顕著に抑えられた。

【結語】雌マウスに testosterone を投与すると細胞質 AR は顕著に減少し同時に核 AR が増加する。その後細胞質 AR は徐々に回復されるが、この過程はCXMで阻害されることからこの回復、すなわちreplenishment過程には蛋白合成が関与していることが示唆された。

### 次号誌 (第12巻1号) について

投稿締切 昭和62年2月15日

発行予定日 昭和62年4月30日

本号誌332頁の投稿の手引きに従ってご執筆下さい。所定の原稿用紙は学会事務局に備えてありますのでお申し出下さい。

岩手医科大学歯学会編集委員会